

釣り

きよなら「きよくせい」(その一)

時季や潮目にもよるが、女川湾も以前より魚が少なくなったように思える。漁の仕方や仕掛けは以前と変わりはないが、魚網が一段と進歩したのである。かつては考えられなかった細い丈夫な糸は、漁のエリアを大きくして魚を大量に捕獲してしまう。さらに、アイナメのような根魚も金網ねざなの枠に餌を入れて置き、魚が一度入ると出られなくなってしまうような仕掛け箱を、沈めるようになったのである。この方法は福島県、岩手県では平成十八年より禁止になったと聞くが、この湾での影響は大きかった。それでも、この湾は潮の出入りが大きく、沖合いから大物が出入りするのでよほどのことがない限り、どこかで魚の群れには出合う。しかし、クーラーボックスに満杯というような大漁は二年に一度ぐらいしかなくなった。

この湾で変わった事と言えば、以前は初夏のころ小形のムギ鯖さばが釣れたが、今は外洋の大型鯖が、九月から十月半ばまで釣れるようになったことであろう。いわゆる日本三大鯖といわれる金華鯖きんかさばで、見事な形ばかりである。鯖の引きは強く連続してアタルので、四、五十も釣れば、かなり体力を消耗する。私の二本の竿を持っていっ

たのも鯖だったのだろう。鯖はどんな餌にもとびつくが、底に着いていた餌に来られると、予想してないだけに泡を食う。ガツンといった時、竿はすでに水中なのである。一般的にシーズン中の鯖釣りは、コマセをしながら四、五本を連ねた化け鉤を使うのであるが、全ての鉤に四十センチクラスが一連に来ると鰹よりはるかに重い。挙句の果ては六号のハリスを切って何尾かはバレる。もし、バレてくれなければ、リールが巻けなくなり、糸を手で繰るしなくなる。

鯖は取り込んでも手がかかる。絶命するまで暴れまわり、仕掛けは糸くずのようになって、解けなくなるのである。しかも冷凍庫を持たない船の鯖はすぐに活きが落ちる。私の船には活かし箱が付いているが、普段は救命用具入れに使用しているので、どんな釣りにも使用したことがない。私は釣った鯖は船の上で三枚におろし、塩を軽くまぶして帰路につく。Ｙさんのところでそれを一晚干せば、丁度食べごろの上等の味となる。

次に面白いのは河豚ふぐである。河豚も群れでいるが、釣り方は一尾ずつである。十号位の鉤に袋イソメを鉤が隠れる程度に付け、河豚を上層に少しずつ浮かし、魚と餌を見ながら釣る。餌が見えなくなったら軽くあわせれば掛かる。合わせ遅れて魚に飲み込まれると、

彼らのかみそりのような歯でどんな丈夫なハリスももたない。河豚も良形になると二十五センチを超えるものも出て、手応えがあつて面白い。河豚は種類が多く十指に余るが、料理法を知らないと毒にあたつて死に至ることもある。河豚で有名なのが下関のトラフグであるが、女川湾ではあまり見られない。女川の河豚のほとんどはマフグとゴマフグである。どちらも肉は無毒であるが、肝臓と卵巣は猛毒で、皮と腸は強毒である。河豚の仲間には、肉や身にも毒を持つているものもいるので、素人の調理は極めて危険である。私は河豚を料理する。土地の漁師さんに習ったもので、孫を含め家族中で刺身や鍋で食べる。大きな刺身皿にアイナメ、カレイ、河豚と並べて出すと河豚、カレイ、アイナメの順に消えていく。ここで河豚料理の講釈をするつもりはないが、一つだけ言えるのは、河豚は他の魚と違い腹に刃物を入れないこと。背から切り込みを入れ、皮と一緒に内臓の全てを取り除くことである。昔の侍なら背に刃を入れるのは、切つても切られても名誉なことではないが、河豚の捌き方はこれしかない。実は慣れないとこれも難しいのだ。河豚のおいしさはこの難関を食欲が越えさせてくれた。女川湾で鯖や河豚が沢山釣れるようになったのも温暖化の為せる業なのであろうか。私の釣り

の幅が広がったためなら嬉しいのだが・・・。

平成二十年の七月中旬と日記には記されている。潮が変わってア
イナメの大釣りに当たるかも知れない時季である。東京のK君から
電話が来た。私は頃はよしと、F高校の教諭時代からの付き合いで、
釣り好きの友人と以前から約束してあったので、三人で出掛けるこ
とにした。風も弱くうす曇で釣りには絶好の日和であった。普段な
ら高白浜の出鼻で竿を出してその日の様子を見るのだが、東京から
K君も来ている事だし、以前は大釣りのメッカとして名高かった、
女川原子力発電所前に直行した。この発電所の位置は、小乗浜の船
溜まりと江島の間点にあり、牡鹿半島の突端の近くで、陸路自動
車で行くと入江に沿って道は曲がりくねって五十分も掛かる。海路
でも岩礁が多く神経の疲れる航路である。実はこの発電所は故障続
きで、三、四年前から稼働を停止していて温排水は排出していない。
私はそのことは知っていたが、発電所以外の場所でも魚は釣れるの
だから、温排水は出ていなくても魚は居るに違いないと考えた。そ
れにしても、何時、ここを遠望しても釣り船の姿は一隻もなかった。
ただ浮かんでいるのはテロ対策のための巡視船だけであった。

巡視船は普段は錨を下ろして停泊しているのだが、ある霧の深い

日にゆっくり動いたことがあった。この時は一人釣りだったのだが、岬の鼻で位置を知らせる霧笛があまりに頻繁に鳴るので、安全を考えて港に戻ろうとした。視界は十メートル位しかない。勝手知ったる湾の内である。真西に向かって進めば外防波堤のどこかに着く。

それに沿って湾内への入り口を見つければよい。連絡船の航路は危険と考え、塚浜側^{つかはま}に少しずれて船をゆっくり走らせた。そのとき前方に霧よりも濃い目の物体が現れた。と同時に「こちら巡視船まつ

しま左舷前方の船、速度を落として左に回避せよ」と天から大きなマイク音が聞こえてきた。前方を良く見ると見上げるような灰色の壁が、ゆっくりと動きながら再度忠告する。あつ、船だ！急いで取り舵を切り、高い船の壁から離れた。巡視船には精巧なレーダーがついている。私の船にはレーダーはない。それにしてもあの高い位置からのマイク音は、船の大きさを想像させるに十分だった。私は、この「まつしま」に希望もしないのに招待された。

「事」の起こりは、K君ともう一人の友人の三人で、釣り船のほとんど見ない原子力発電所前での釣りだった。釣り人の常識としては釣り船の居ない海域は釣れないのが相場なのだが、私はだからこそかえって、穴場になっているのではないかと読んだのである。船

はかつての原発の排水口の近くのロープにやっとの思いで繫いだ。
ここのロープは丸浮きだけが海面に僅かに頭を出していてほとんど
が海中に沈んでいるのだ。暫くは三人にアタリは無かったが、遂に
友人にアタリが来た。彼は釣り上手で、一緒に来るといつも彼の方
が沢山釣るのである。竿の撓りしなから見るとかなりの大物だ。魚の姿
が見えるところまで巻き込んでくると、大きなカレイである。当然
タモ網を必要とした。五十センチは超えている。カレイという魚は
単独で居ることは少ない。砂地という場所を選ぶからである。経験
から言うと、一枚上がれば数枚あがるのが常である。これは幸先がさいさき
いいなどと言っていた時、一艘の小船が近づいてくる様子である。
これはよくあることで、船頭は周りの船の竿の上げ下げを注意深く
見ていて、釣れる船に寄って来るのである。しかもこれは、釣り船
の不文律で船がぶつかるほど近づかなければ、苦情は云わないこと
になっている。

小船は良く見ると小旗を立てている。作業船などでは見かけるが
釣り船では珍しい。双眼鏡で見みると、旗は海上保安庁のマーク
である。母船の巡視船は我々から三百メートル位離れたところに錨
を下ろしている。小船は沿岸の巡回を終了し、母船に戻るのだろう

と見ていた。すると、母船に向かっていた小船は急に向きを変え我々の船に近づいてきた。ロープに繋いではあっても注意するなら職漁者の問題で、保安庁は管轄外である。我々の人相がテロリストに見えたわけでもあるまい。小船は我々の船に横付けされた。私はどの船にもそうするように帽子を取って「ご苦勞様です」と挨拶した。

小船には四人が乗っていて、私の挨拶を鸚鵡返すように「ご苦勞様です」と敬礼しながら答礼をした。一人の乗務員が船舶操縦免許を見せてくださいと云う。私は「はい」といって差し出した。免許証はすぐに返された。次に別な若い乗務員が私の船に乗ってもいいですかという。七人乗りの船に三人が乗っているだけだから余裕はある。「どうぞ」と言うと一人が乗り込んできた。彼は運転席をひと回りして登録番号や係留認可証の確認をしたらしい。彼は私の船から自分たちの小船に移ろうとした時、思い出したように船体検査証を見せてくださいと云った。私は先ほどと同じように検査証を渡した。彼は念入りに見ている風だったが、「おかしいなあ」と首を傾げるのである。「これだけですか」と彼はいう。「そうです」と答えると、暫く他の乗務員と何か話をしている様子だったが、今度は「キャビンの中を見せてください」と云うのである。キャビンには釣具類し

か入っていない。若い乗務員が首を振る。その様子を確認して階級章が上と思われる中年の乗務員が「この船は中間検査を受けていませんね」という。私は「そんなことはありません」と答えると、「ほら、見てください。ここが空欄になったままでしょう」と書類を示しながら云うのである。確かに昨年の検査欄は空白のままなのである。しかし、私としてはどうしても納得がいかない。八年も乗った船の二年に一度の検査帳は、昨年の中間検査だけが空欄になっていたのである。実は私はいままで船の管理は、Yさんに一切を任せていたのである。乗務員にそのわけを説明し、民宿のYさんに携帯を入れてもらうと「自分は検査を受けた記憶がない」という返事が返って来た。私の頭の中ではある仮説が成り立ったが、検査を受けていなかったという事実は動かしようがない。